

叙事詩の宗教哲学

—Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (XXIV)¹—

茂木秀淳 社会科学教育講座

キーワード：モークシャダルマ、ダルマ、ジャージャリ、不殺生、ヴィチャクヌ王、チラカーリン、

[258章] (D.266章, K.272章)

- (47) かくして、妻も私も道を行くインドラ神も²、法を犯してはいない。しかし、(私が) 正気を失ったのは (pramāda) は (法を) 犯している。
- (48) 仙人たちが「悪意は嫉妬より生じる」と言ったのはこのためである。それでも (tu) 私は、嫉妬によって困われ、悪行の海に沈んだのである。
- (49) 善き妻を、熱心である故 (接待を?) 命じられた³善き妻を、守護されるべき故、守られるべき者(と呼ばれる善き妻) を殺した後で、一体誰が私を救えようか。
- (50) (思慮) なしに⁴私に命じられた賢明なチラーカーリン、もし彼が今ものんびり屋であれば、彼が私を罪から救えるのだが。
- (51) のんびり屋よ、汝に繁栄あれかし、汝に繁栄あれかし (cf.258.3ab)。のんびり屋よ。もし今ものんびり屋ならば、汝はまさしく (tato) のんびり屋なのだが。
- (52) 私を母を、そして私が得た熱力を救うべし。そして自分自身をもろもろの罪から⁵救うべし。今ものんびり屋であるべし。
- (53) 汝の悠長さは大きな英知と⁶共に生まれた。それは今も汝に有効であるべし⁷。今ものんびり屋であるべし。
- (54) 長い間母に待ち望まれた汝は、長い間胎児として (胎内に) 抱かれた。のんびり屋よ、汝は悠長さを実りあるものとすべし。
- (55) (命令を実行するのは) 苦しいために、ゆっくり行為し、(実行を) 禁じられま⁸長い間眠るべし。我々二人の (両親の) 長い苦しみのために (cirasamtāpāt)、のんびり屋よ、熟慮すべし。』

¹本稿は『叙事詩の宗教哲学— Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (XXIII)—』(信州大学教育学部研究紀要第 115 号 2005 年 8 月) に続くものである。略号などは前稿に準じ、本稿で用いる主なものは以下のとおりである。

- Hara[1987]: Minoru Hara, *Invigoration, Hinduism und Buddhismus*, Festschrift für Ulrich schneider, Freiburg, 1987, pp.134-151
- Hara[1997-2]: Minoru Hara, *A Note on the Gṛhasthāśrama*, LEX ET LITTERAE, Studies in Honour of Prof.Oscar Botto, Trino, pp.221-235, 1997.
- 原 [1998]: 原実『不殺生考』国際仏教学大学院大学紀要第 1 号、pp.1-37, 1998.
- Hopkins[1902]: E.W. Hopkins, *Remarks on the Form of Numbers, the Method of Using them, and the Numerical Categories found in the Mahābhārata*, JAOS vol.23, pp.109-155, 1902.
- Hopkins[1902-2]: E.W.Hopkins, *Phrases of Time and Age in the Sanskrit Epic*, JAOS vol.23, pp.350-357, 1902.

²tridaśeśvaraḥ Cp. tridaśeśvaraḥ, daśadharmagatavāt /

³P. vyasanitvāc ca śāsītām D.,K.: vyasanitvāc ca vāsītām

⁴antareṇa Cn. antareṇa pramādena / Cp. avadhinā /

⁵aatmaanam paatakebhyāśca ゴンダはこの ca の用法を、「一定の韻律を保つため ca の位置が直前の語と入れ替わった場合」の例の一つとして挙げている。(ゴンダ『サンスクリット叙事詩・ブラーナ読本』p.253)

⁶P. ciraprajñatayā D.,K.: atiprajñatayā

⁷P. saphalam tat tavādyāstu D.,K.: saphalam tat tathā te 'stu

⁸P. vāritah D.,K.: dhāritah

- (56) このように、王よ、かの大仙ガウタマは苦悩していたが、その時、息子チラカーリンが、しかも近くに、立っているのを見た。
- (57) チラカーリンはといえば (tu)、父を見て、大変に悩んだ。それから (母を殺すための) 武器を捨てて、頭(を下げる事)によって (mürdhnā)、(命にそむいたことに対する) 恩寵を求めて近づいた。
- (58) しかしガウタマは、頭によって地に臥す息子を、そして生気を失っている⁹妻を見て、最高の歓喜を得た。
- (59) これによって、かの妻は、(夫が) 寂しい場所で草庵にいる時も、偉大な夫と別れる¹⁰ことはなかった。注意深い息子もまた (別れることはなかった)。
- (60) しかし、息子が武器を手にして立っていれば、(父の言うことを) 否定することなく殺したのであろう。行なったことを尋ねた後、自分の行為を決定すべし¹¹。
- (61) (父は) 父の両足にひれ伏した息子を見て、(結果の) 恐ろしさのために、武器を持ってという(父の) 軽率さに反対している¹²、と理解した (buddhiś cāsīt)。
- (62) それから、父は、長い間称賛し、そして長い間頭に口づけをし、そして長い間両腕で抱きしめた後、「長生きせよ」と言った。
- (63) かくしてかのガウタマは、歓喜と喜悦に満たされ¹³、息子を褒めて (abhinandya cf.Hara[1987] p.144)、大きな英知をもつ者よ、次のことばを語った。
- (64) のんびり屋よ、汝に繁栄あれかし、のんびり屋は長く生きるべし。汝がのんびりするならば、私は長い間大いに苦しむ(ことはない)であろう (?)¹⁴
- (65) 最上の聖者、知識あるガウタマは、賢明なるのんびり屋における徳性を示すために、次の偈文も語った。
- (66) 友はゆっくりと獲得すべし。すでに得た友は (kṛtam) ゆっくりと手放すべし。なぜならば、ゆっくりと作られた友は、長く保つ価値があるのだから。
- (67) 執着、高慢さ、自惚れ、危害、悪行において、そして好まぬことを為さねばならない場合も、のんびり行動する者は称賛される。
- (68) 親戚、友人、使用人たちの、そしてまた妻の過ちがはっきりしない場合¹⁵、のんびり行動する者は称賛される。
- (69) このようにかのガウタマは、パーラタ族よ、彼の息子の行為がゆっくりなされたことに喜んだのである、クル族の子孫よ。

⁹nirākārām Cn. nirākārām, lajjayā pāṣāṇabhūtām / Cp. nirākārām [ām], samagrāṅgām, krodhahayādyāveśāśūnyām / Cv. nirākārām, nitarām ākāra yasyāstām / Deussen: ohne Fassung Skanda Mahāpurāṇa: jīvantīm

¹⁰sambhedam Ca., Cp.: sambhedam, svābhiprāyaprakatanena manodauhस्थ्यam / Cp. daurmanasyatām / Cs. tena puramḍareṇa bhavataḥ patnī sambhedam saṅgamam na nītā /

¹¹この詩節は、P. と D., K. とで大きく異なっている。

hanyāt tv anapavādēna śāstrapāṇau sute sthite /
vinitam praśnayitvaa ca vyavasyed ātmakarmasu // (P.)
hanyā iti samādeśaḥ śāstrapāṇau sute sthite /
vinitē prasavaty arthe vivāse cātmakarmasu // (D., K.)

Cv. ātmakarmasu vivāse viśeṣeṇa vāse kurvati, bahukālam vicārya tiṣṭhatīty arthaḥ /

¹²saṃvṛṇoti Cv. saṃvṛṇoti, aṅgīkaroti / Cv. は cāpalya は Cirakārin のものと解しているようである。

¹³P. pṛītiharṣasamanvitāḥ D., K.: pṛītiharṣaḡunair yutaḥ

¹⁴P. cirāyamāṇe tvayi ca ciram asmi suduḥkhitāḥ D., K.: cirāya yadi te saumya ciram asmi na duḥkhitāḥ P. は、どこかに suduḥkhitāḥ を否定辭がないと意味をなさない。

¹⁵avyakteṣv aparādheṣu Cp. avyakteṣu, pramāṇāntarāparīśuddheṣu /

- (70) かくしてそれゆえ、人はあらゆる行為において、吟味し、ゆっくりと決定をなすならば、長い間苦しむことはない。
- (71) 長い間怒りを保持し、長い間行為を制御すれば、後悔を引き起こす行為は、いかなるものも生じない。
- (72) 長い間、長老を敬うべし。長い間(近くに)座って礼拝すべし。長い間もろもろのダルマを実行すべし。そして長い間(ダルマの)探求を行うべし。
- (73) 長い間賢者の近くに座り、長い間学ある者に仕え、長い間自己を制御した後、長い間尊敬されるであろう。
- (74) 他の者がダルマに関連したことばを語る場合でも、ゆっくりと問うべし。ゆっくりと話すべし。(そうすれば)長い間、軽蔑されないであろう。
- (75) 偉大な熱力をもつ賢者は、多くの年月、彼の草庵において礼拝した後、息子と共に天界に赴いた。

[259 章] (D.267 章, 9559-9595, K.273 章)

ユディシュティラは言った。

- (1) 王は、どのようにして生き物を守るべきか。どうすればいかなるものも苦しめることがないのか。私は汝に尋ねる、善き人々の中で最上の者よ。それを私に語るべし、祖父よ。

ビーシュマは言った。

- (2) ここでも人はこの古譚を語る。デュマトセーナとサトヤヴァント王との対話を。
- (3) サトヤヴァントは、父の命令によって死刑にされようとしている人々のところで¹⁶いまだ語られていないことを¹⁷語った、と我々に伝えられている。
- (4) 今や正義は不正となり、不正は正義となっている。死刑が正義であるようなこと、そんなことはあってはならない。

デュマトセーナ王は言った。

- (5) それでは、死刑が行なわれないことが正義だとすれば、いつ正義があることがあろう¹⁸。追い剥ぎ共が殺されるべきでないならば、サトヤヴァントよ、混乱が生じるであろう。
- (6) (もし死刑が行なわれなければ、)「これは私のものだ。それは彼のものだ」という(区別)は(? mamedam iti nāsyaitat)、カリユガでは生じないであろう。また日常の営み(lokayātrā)も(適切では)なくなるであろう。あるいは汝が(善い方法を)知っているならば、我々に語るべし。

サトヤヴァントは言った。

- (7) 三種のヴァルナはすべてパラモンの束縛が¹⁹かけられるべし(kāryā)。法の網に捕えられた者の中はわずかながら違反する者もいるであろう²⁰。
- (8) 彼らの中で違反する者に対しては誰にでも、再生族は(罪を)知らせるべし。(再生族が)「この者は私の言うことを聞かない」という者を、王は処罰すべし。

¹⁶P.,K.: vadhāya nīyamāneṣu D. vadhāyonīyamāneṣu

¹⁷avyāhṛtaṃ Ca. avyāhṛtaṃ, pitari prati śikṣārūpaṃ vacanaṃ putreṇa vyāhartum ayogyam api / Cn. avyāhṛtaṃ, daṇḍānām apy adaṇḍatvaṃ, prāk kenacid anuktaṃ / Cs. kenāpy anuktapūrvam /

¹⁸dharmah ko jātūjid bhavet Ca. ko jātūcid bhavet, na ko 'pīty arthaḥ /

¹⁹brāhmaṇabandhanāḥ Ca.,Cn.: brāhmaṇabandhanāḥ brāhmaṇādhīnāḥ /

²⁰P. alpo vyapacariṣyati D. anyo 'py evaṃ carīṣyati K. alpo 'py apacariṣyati Ca. alpo, kṣudro vyapacariṣyati, apacāraṃ kariṣyati / M5. nālpo

- (9) いかなる聖典も、真実から逸脱することなく²¹、実行されるべし。そうでなければ、もろもろの行為を、法典を規定に従って吟味することなく²²、殺してはならない。
- (10) 王はおい剥ぎ共もを殺すが、より多く罪なき者も殺している²³。一人の(追い剥ぎの)男が殺されるとき²⁴、(その)妻、母、父、息子も殺される。それ故、一人の悪しき者が (pareṇa) 法を犯した場合には、王は、(このことを)正しく熟慮すべし。
- (11) 信仰なき男も、同時に徳性を得る。信仰ある者からも信仰なき者からも、良からぬ子孫が生まれる²⁵。
- (12) 根本を断つことは為されるべきではない (cf. Hopkins[1902] p.151)。それは永遠の法ではない。実際 (api khalu) 殺害することはないとして²⁶、贖罪は規定されている。
- (13) 脅しによって、縛縄によって、身体の傷害によって (贖罪はなされるべし)。彼らは、最初に損害多き死刑によって、苦しめられるべきではない²⁷。
- (14) あるいは、彼らが保護を求めて、プローヒタ祭官に訴え (paryeyuḥまわりに来る)、「バラモンよ、我々は二度と罪を犯しません」と言う時には、
- (15) その時には、「放免が適当なるべし」というのが王の命令である²⁸。杖と毛皮をもつ剃髪のバラモン (が処罰される場合) は、居住が (?)²⁹ 適当である。
- (16) より重要な人々は³⁰より大きな (罰がふさわしい)。繰り返し犯した場合には、最初 (に犯した) のと同じように、放免されるべきではない³¹。

ドュマトセーナ王は言った。

- (17) 人々を慣習の中に³²制御することができる場所はどこでも、犯されない間は、それが法と呼ばれるのである。
- (18) しかし死刑が行なわれないならば、一切 (の法) は消滅するであろう。人々は、以前もさらにその以前も (cf. Hopkins[1902-2] p.354, fn.3)、よりよく統治されていた。
- (19) (かつては) 人々は温和で真実にあふれ、敵意は少なく怒りも少なかった。かつては叱責による罰のみがあった。そのすぐ後には言葉による罰が³³(あった)。
- (20) (その後) 没収による罰も生じた。今は死刑による処罰が行なわれている。死刑によっても悪しき人々は制御することはできない。

²¹ tattvābhedenā Cn. tattvātmakatvāt tattvaṃ śarīraṃ (sattveti pāṭhe jantuh), tasya abhedena, avināśena yatpravṛttam śāstram / N 注によれば、「身体をこわすことなく」 Ca.,Cs.: śāstram, śāsanam daṇḍaḥ /

²² asamikṣyaiva karmāṇi Ca. karmāṇi, aparādhahetubhūtāni, asamikṣya, avicārya /

²³ P. hinasti D.,K.: nihanti

²⁴ P. puruṣe hate D.,K.: puruṣeṇa te

²⁵ P. jāyate 'śobhanā prajā D.,K.: śobhanā jāyate prajā Cv. sādhubhyaḥ sakāśād asādhvī prajā śobhanā jāyate /

²⁶ P.,K.: api khalv avadhenaiva D. api svalpavadhenaiva

²⁷ P. te kleśyā na puro 'hitasampadā D.,K.: te kliśyā na purohitasamśadi Cp. purohitasampadaḥ purohitādhikārād api / pāṭhāntare samśadi sabhāyām / Cs. puro 'hitasampadā ahitasampada, aparādhād atīśayena hetunā puraḥ prathamam na vadhadāṇḍena kleśyā ity arthaḥ /

²⁸ P. nṛpaśāsanam D.,K.: dhātṛśāsanam Cp. dhātṛśāsanam brahmaśāsanam / rājñām adaṇḍyo nāstīty āha — nādaṇḍyo nāma rājño 'sti yaḥ svadharme na tiṣṭhati — Manuḥ (8.335cd) /

²⁹ P. vāsanam D.,K.: śāsanam

³⁰ garīyāmsa Ca. garīyāmsaḥ pūjyāḥ, vidyābhijanatapāḥ sambandhenotkrṣṭāḥ / Cs. vidyāśilādibhir garīyāmsa brāhmaṇāḥ /

³¹ na yathā prathame tathā Cs. prathame puruṣā yathā visargam arhanti, na tathā garīyāmsa ity arthaḥ / d 句の最初の語 na が c 句の arhanti を否定していることになる。

³² samaye N. yatra yatra samaye maryādā yām samyantuṃ niyantum / Cs. dhigdaṇḍena samaye niyantum na śakyeramś ced arthadaṇḍo dharmah / tatrāpi na śakyeramś ced vadhadāṇḍo dharmah ity arthaḥ /

³³ vāgdaṇḍas Cs. vāgdaṇḍaḥ, durātmann ityādiraparūṣabhāṣaṇarūpaḥ /

- (21) 人々には追い剥ぎはおらず、神々にもいない、と伝えられている。そしてガンダルヴァと祖先にも(追い剥ぎは)いない。(追い剥ぎとは)誰にとっての誰なのか。ここでは(追い剥ぎは)何者でもない³⁴。
- (22) (追い剥ぎは)焼き場から蓮を奪い取り、またピシャーチャから神格を奪い取る³⁵。無知で理知を損なった(hatabuddhi)彼らと誰が約束をするであろうか³⁶。

サトヤヴァントは言った。

- (23) あなたは、死刑なしで(ahimsayā 不殺生によって)、この善人たちを守ることができないのであれば、何らかの過去と未来の利益(lābha)によって、死をもたらしべし³⁷。

ドュマトセーナは言った³⁸

- (24) 王たちは、世間の運行のために³⁹最高の苦行を行なう。(王たちは)そのような(追いはぎ共)を恥として⁴⁰、(王たちは)そのように振舞うのである⁴¹。
- (25) 人々は恐れさせれば⁴²、善行をなす。王たちは、欲の故に悪行の者を殺すことはない。王たちは、多くの場合、善行によってのみ人々をを統治するのである。
- (26) 善き人のこのような善き振舞いに⁴³世間の人は従う。なぜならば人は常に師の振舞いに従うからである。
- (27) 自己を制御することなく、他の人々を制御せんと願う、感官を対象に支配された者を、人々は笑う⁴⁴。
- (28) 欺瞞と迷妄のために、王にとって何か不適切なことを⁴⁵するような者は、あらゆる手段を用いて制止されなければならない。そうすることで彼は罪から免れるのである。
- (29) 悪行を制御しようとする者は、まず自分こそを制御すべし。そして、厳罰によって、近い親戚たちも⁴⁶罰すべきである。
- (30) 罪を犯して苦しむべき⁴⁷者が大きな苦痛を得ないところでは、悪行は増え、法は絶えず縮小する。というように、慈悲をそなえた賢明なバラモンは教えた⁴⁸。

³⁴kaḥ kayeha nakaścana N. kaḥ kasyeheti gata evaprasāṇa na kaścana kasyāpīty uttaraṃ cadasyuvadhe tadbhāryādīnām vadho nāstīty arthaḥ sambandhābhāvāt /

³⁵P.,D.: padmaṃ śmaśānād ādatte piśācāc cāpi daivatam K. pakvaṃ śmaśānād ādatte piśācāṃś cāpi daivatam Cp. ādatte iti kākvā / Cv. pakvaṃ śmaśānād ādatte ity atra, hataś coraḥ piśāco bhūtvā daivatam, devatāsaṃbandhi / pakvaṃ, maraṇādīnādārabhya daśame 'hani dakṣiṇapārśve yamāya, uttarapārśve rudrāya, madhye pretarājāyeti dattaṃ pakvaṃ piṇḍādyannaṃ śmaśānād ādatte, apaharati / idaṃ copalakṣaṇam tannātātāḥ prajāś ca āviśya bādhatē / Cp. jīrnadevāyatanasthā devapratimāḥ piśācāir ākramyanta ity āgamaḥ / Ca. yathā śmaśānāj jātaṃ padmaṃ na devārādhaneṣu adhikurute kaścit tathā tadāśrayagarhitā nopādīyate yathā ādityapratimā / yatra piśācādi adhidivatam jīrnadevakule ca pratimā ca kila pūjyamānā ca piśācāḥ adhibhuñjate ity āśayaḥ / evam āśrayagarhiteṣu bhāveṣu kaḥ samayaṃ vyavahāraṃ kuryāt / Cn. piśācāt piśācopatātāt, ādatte cailādīkam iti śeṣaḥ / daivatam samayaṃ devatāśapathādirūpaṃ / Cs. teṣu samayaṃ sāstramaryādāṃ yaḥ kurvīta sa kuṇapanirmālyam grhṇāti, piśācān devatvena grhṇāti /

³⁶P. kuryād ajñeṣu D.,K.: kaścit kuruvīta

³⁷kasyacid bhūtabhavyasya lābhenāntaṃ (K. lobhenāntaṃ) tathā kuru / Ca. antaṃ daṇḍam / Cp. kasyacid bhūtabhavyasya, pṛthivyādyanyatarakāryasya cakṣurghrāṇapādahastāder ekaikasyāntaṃ kuru, dasyor lābhena / yadvā dasyor lābhe sati nāntaṃ kuru, kiṃ tu ekāṅgavadhenānyeṣāṃ āṅgānāṃ rakṣaṇaṃ kuru / Cs. bhūtānāṃ bhavyasya kṣemasya kasyacid lābhena lābhahetuoḥ / Cv. bhūtabhavyasya jagataḥ lābhena tadrakṣaṇārthaṃ ity arthaḥ / Ganguli: Bhūta bhavya is sacrifice. (p.254.fn.5) lābha は「追い剥ぎの捕縄か」

³⁸D.,K.にはこの語はない。従ってD.,K.では以下に続く詩節はサトヤヴァントの言葉と理解されているようである。

³⁹lokayātrārthaṃ Ca. lokayātrā, lokasya svadharme sthāpanā / Cp. janatāsvadharmopadarśanārthaṃ / Cs. daṇḍam antareṇa lokarakṣārthaṃ /

⁴⁰apatrapanti Ca. coraḥ apatrapanti /

⁴¹tathāvṛttā bhavanti ca Ca. yathāvṛtto rājā tathāpravṛttāś caranti / Cn. rājānaḥ tādr̥gbhyaḥ stenebhyo 'patrapanti, tathāvṛttāḥ, prajānāṃ nirdoṣatvaṃ kāmayamānāḥ pitara iva tapasvino bhavanti / Cs. tathāvṛttāḥ svayam adaṇḍārthavṛttā bhavanti /

⁴²vitrāsamānāḥ Ca. vitrāsamānāḥ / [gloss asmākam api evaṃ daṇḍo 'parādhe sati bhavātīti cintayan]

⁴³P. śreyasīm evaṃ vṛttīm D.,K.: śreyaso 'py evaṃ vṛttaṃ Ca. śreyasaḥ api śreyasīm, atyutkr̥ṣtām /

⁴⁴K.はこの詩節の前に、「ドュマトセーナ王は言った」を挿入している。D.にはこの語はない。

⁴⁵asāṃpratam Cs. asāṃpratam, prajāhimsanam /

⁴⁶bandhunn anantarān Cn. anantarān, putrasodaryādīn /

⁴⁷P. kleśyo D.,K.: nīco

⁴⁸K.はこの詩節の前に第28詩節に類似した以下の詩節を挿入している。

yo rājā lobhamohena kiṃcit kuryād asāṃpratam /
sarvopāyair niyamyah sa tathā pāpān nivartate //

- (31) とうように、かつて大きな憐憫の情から(不殺生を)鼓舞する(?āsvāsayadbhiḥ)祖父たちは、私に教示したのである、父よ。
- (32) このように⁴⁹王はクリタユガ期においては(不殺生という)最初の選択によって⁵⁰統治した⁵¹。そしてトレーターユガ期には、一本足の少なくなったダルマと共に進まねばならなかった。ドウヴァーバラ期には二本足のダルマと共に、次の(トレーター)ユガ期には一本足のダルマと共に(進まねばならなかった)。 (cf.MBh.XII.231(B), Manu 1.81)
- (33) そしてカリユガ期になると⁵²、王たちの悪行によって、(また)時期の特性のゆえに、ダルマの十六分の一部分(のみ)が存在することになろう (cf.Hopkins[1902] p.133)。
- (34) 今や最初の選択によっては、サトヤヴァントよ、混乱が生ずるであろう。(王は)寿命と能力と時を考慮して⁵³、苦役(tapas すなわち daṇḍa か)を命じるべし。
- (35) 真実のために、大きなダルマの果報を⁵⁴捨てないように、生き物に対する慈悲の目的として、自存者たるマヌは語った。(Cf.Hopkins[Great Epic] pp.17-23 Manu)

[260章] (D.268章、9596-9635, K.274章) (祭式擁護論)

ユディシュティラは言った。

- (1) (祭式の)棄却は⁵⁵、生き物との対立がないので、六種の徳性を作る⁵⁶。二通りにはたらくダルマについて私に語るべし、祖父よ。
- (2) 家長期のダルマと棄却というダルマの⁵⁷、近い位置にある⁵⁸両者のうち、一体どちらがすぐれているのか、祖父よ。

ビーシュマは言った。

- (3) 両者のダルマともたいへん優れており、両者とも行なうに最も困難である。君よ、両者とも大きな果報があり、両者とも善き人々によって行なわれている。
- (4) ここで汝にその両者の基準(prāmāṇya)を語るであろう。ダルマの意味についての疑いを断ち切り、心を集中して聞くべし。
- (5) ここで人はこの古譚を語る。カピラ仙と牛の会話を⁵⁹。それを聞くべし、ユディシュティラよ。
- (6) 永遠普遍の古典ヴェーダを⁶⁰見返しつつ、かつてナフシャ王はトヴァシュトリのために⁶¹牛を犠牲にした、と我々に伝えられている。
- (7) その時、元気あふれ(adinātmā)、真実に住し、教義に満足し、知恵あり、食事を節制したるカピラは、その牛が(祭柱に)つながれているのを⁶²見た。(Cf.Hopkins [Great Epic] p.99.10 Kapila, a teacher of unorthodox non-injury)

⁴⁹etat Cp. etat rājyam /

⁵⁰prathamakalpena Cn. prathamakalpena, mukhyenāhiṃsāmayena daṇḍena / Cs. sarvabhūtahiṃsāvarjanadharmeṇa /

⁵¹P. abhajat D.,K.: jayat

⁵²prāpte Cs. prāpte pravṛddhe /

⁵³nirdīśya Cs. nirdīśya niścītya /

⁵⁴dharmaphalaṃ mahat Cn. dharmaphalaṃ mahat, jñānam / svargādeḥ kṣudratvāt /

⁵⁵P.,K.: tyāgaḥ D. yogah

⁵⁶śāḍguṇyakārahā Ca. śāḍguṇyakārahā, śaṇṇām jñānaiśvāryabalavīryatejaśaktīnām guṇānām īśvare niyatānām jīve 'pi kāraka itī niścītya jñātaṃ mayā / adhunā tu ya ubhayabhāḥ jñānakarmasamuccayanvayī syāt taṃ me brūhi /

⁵⁷P. tyāgadharmasya D.,K.: yogadharmasya

⁵⁸adūrasamprasthitayoḥ Cs. sudūrasamprasthitayoḥ, atyantabhinnaprasthānayoḥ / N. adūre samīpe ekakāryārthatvena samprasthitayoḥ pravṛttayoḥ /

⁵⁹c 句は9音節からなる。

⁶⁰āmnāyam Ca. āmnāyam śrotriyāgamane madhuparkārthaṃ paśor māraṇaprasāṃsakam /

⁶¹tvaṣṭur Cp. tvaṣṭāraṃ devam uddīśyety arthaḥ /

⁶²niyuktām Cn. niyuktām, hantūṃ puraskṛtam / Cs. niyuktām yūpe baddhām /

- (8) 彼は、確固として⁶³何も恐れることなき最上の認識 (buddhi) を得ていたが、突然「私は、ゆるんだ真理を思い出す⁶⁴。ああヴェーダよ」と言った。(Cf.Hopkins[Great Epic] p.99 (Kapila as a teacher of unorthodox))
- (9) スューマラシュミ仙は、その牛に入って、修行者に語った。もし「ああヴェーダよ」と、ダルマが蔑まれるならば、何によって劣ったものと蔑まれるのか⁶⁵。
- (10) 堅忍をもち⁶⁶、天啓聖典による認識を目とする苦行者たちは、ヴェーダはすべて、自己を知る者(神?)によって⁶⁷語られたと考えている。(Cf.Hopkins[Great Epic] p.92)
- (11) そのように渴愛を去り、苦しみなく、願望から自由で、完全に企てなき者にとって⁶⁸、もろもろのヴェーダにいかなる疑問があろうか。

カピラ仙は言った。

- (12) 私は、もろもろのヴェーダを非難するのではない。何も疑うことはない。それぞれの生活期の行為は、同一の目的をもつ⁶⁹、と我々は伝え聞いている。
- (13) (その同一の目的に) 棄却者は赴く。林住者も赴く。そして家住期と梵行期の者の両者も赴くのである。
- (14) なぜなら四(種の生活期は)永遠なる神々の行く道であると考えられる。これらの優劣、効力は果報に関して言われるのである。
- (15) このように知って、あらゆることは行なわれるべし⁷⁰、ということはヴェーダにかなっている。そして別のところでは、(あらゆることは)実行するべきではない、と最終的な⁷¹天啓聖典は伝えている。
- (16) 実行しなければ、誤りが⁷²ないのであれば、実行すれば最大の誤りが(あろう)。このように決まっている聖典が有力か無力かは知るのが難しい。
- (17) もしここで何か明らかに不殺生よりもすぐれていると考えられるならば、もろもろの伝承聖典に基づくことなく語るべし。もしも汝がそれを見つけているならば。

スューマラシュミ仙は言った。

- (18) 天啓聖典は常に『天界を望む者は祭るべし』と伝えている。まず果報を構想し、それから祭式は実行される (pratāyate)。
- (19) 山羊、馬、羊、牛、そして鳥の群、村と森(荒地)の草(薬草、植物)は、生き物の (prāṇasya) 食べ物と伝えられている。(Deussen: Brh Up. 6.1.14)

⁶³naiṣṭhikīm Cs. naiṣṭhikīm, mokṣaviṣayām /

⁶⁴P. smarāmi śīthilam satyaṃ D. saṭim aśīthilām satyaṃ K. svareṇa śīthilām satyaṃ Ca. aśīthilām, śīthilavacanam tu dayāparam / Cp. (sa nāma śīthilam) śīthilam, śanaiḥ / satyaṃ vacanam / vedā evam eva pratipādayantīty abhiprāyeṇa satyapadaprayogaḥ / Cs. aśīthilām, tarkaiś cālayitum aśakyām / satyaṃ, nityaphalām / Cv. (reading svareṇa śīthilo 'satyā): uccair vaktum bhūtyā alpasvaro bhūtvā, gomedhasyāpi vidhānāt, vedā asatyā iti sakṛd abravīt /

⁶⁵yadi matā dharmāḥ kenāpare matāḥ Cp. vedā yadi matāḥ avamatāḥ ity arthaḥ / tadā kena prakāreṇa pramāṇena apare bhavadabhi-matā śamadamādayo 'pi dharmā matāḥ / tatrāpi vedānām eva prāmānyasvīkārād ity arthaḥ / Cs. apare tvadīyāḥ sāmkyādayaḥ ke dharmā dambhatve na matāḥ / sarvāni śāstrāṇi dambhatvena matānīty arthaḥ /

⁶⁶P.,K.: dhṛtimataḥ D. dhṛtimantaḥ Cf.Hopkins[Great Epic] p.455, No.34 (Illustrations of Epic Śloka Forms)

⁶⁷viditātmanaḥ Cn. viditātmanaḥ, nityajñānavataḥ paramēśvarasya /

⁶⁸nirārambhasya Ca. nirārambhasya mukukṣoḥ vedeṣu karmaprāśasy adarśakeṣu kā vivakṣā astīty arthaḥ / Cn. tasya īśvarasya na vaiṣamyavivakṣayā vedavacanam sambhavati / Cp. tṛṣṇāvanto hi kāmajvarasamtaptāḥ pāpiṣṭhā viṣayalolupatayā vedān nindanti, svābhiprāyeṇārtham kalpayanti / bhavāms tu na tathety arthaḥ / Cv. nirārambhasya, yajñādyārambharahitasya tava deheṣu kā vivakṣāsti / ata evedam vinindasīti bhāvah /

⁶⁹ekārthāni Cv. ekārthāni, ekasvargākyaphalāni /

⁷⁰ārabheta Ca. ārabheta, āśramavīhitam, phalābhisamdhim vinā karmety arthaḥ /

⁷¹naiṣṭhikī Cn. naiṣṭhikīty anenaitasyāḥ siddhāntatvaṃ darśitam / Cs. naiṣṭhikī, mokṣaviṣayā /

⁷²adoṣaḥ syāt Ca. doṣaḥ, anirmokṣārūpaḥ /

- (20) このように食べ物は、毎日朝に晩に捧げられる。家畜と穀物は祭式の要素である、と伝えられている。
- (21) 造物主はこれらを祭式と共に構想した。その祭式によって威光ある造物主は、神々を祭った。
- (22) 七種、七種の⁷³これらすべての生き物は、相互に依存した(?)⁷⁴。祭式においては、すべての犠牲獣は最高者の名称をもつ⁷⁵、と言われている⁷⁶。(Cf.Deussen (p.451): Rigveda 10.95.15)
- (23) このことはかつての人々によって、そしてさらにそれ以前の人々によって同意されてきた。一体自分に備わっている能力を⁷⁷知る者で、(祭式の犠牲獣を)選ばない⁷⁸者がいようか。
- (24) 家畜、人間、木、そして草も、ひたすら天界を願う。しかし(祭式における)犠牲なしには天界はない⁷⁹。(Cf.原 [1998] p.16)
- (25) 草、家畜、木、枝(vīrudh)、ギー、牛乳、ヨーグルト、供物、地面、方角、信仰、時、これらが十二(の祭式の構成要素)である。
- (26) そして、讃歌、祭文、旋律と祭主で⁸⁰十六である。火は家長であると認識されるべし。それ(火)は第十七番目(の要素)と言われている。これらが祭式の構成要素である。「根本は祭式である」と天啓聖典は伝えている。Cf.Hopkins[Great Epic] p.167, fn.3 (other groups of seventeen)
- (27) ギーによって、牛乳によって、ヨーグルトによって、糞によって、凝乳によって、皮によって、尾の毛によって、角によって、足によって、牛は犠牲を生じる。このようにひとつづつその(?祭式の)すべての要素は規定されている。(Cf.MBh.XII.255.37cdef)
- (28) (人々は?)報酬を伴う祭官たちと一緒にあって、祭式を行う(vahanti)。また、これらすべてを集合して、祭式を完成させるのである。
- (29) なぜならば(これらすべては)祭式のために創造されたのである。天啓聖典が伝えるように、そのようにかつてのそしてさらに以前の⁸¹人々は振舞ってきた。
- (30) 「祭式は捧げられるべし、と結果を願わずに祭るものは、何も殺さず⁸²、(殺生を)企てることもなく、何も脅かすことはない。Cf.Hopkins[Great Epic] p.450, No.18 (Illustrations of Epic Śloka Forms)
- (31) これら祭式の部分は正しく述べられた。このことに疑いはない⁸³。規定にかなったこれらのこれらの部分は、規定によって相互に働いて(祭式を)完成させるのである⁸⁴。
- (32) そこにもろもろのヴェーダが依拠している聖典(āmnāya)を聖仙のものと私は見る(cf.Hopkins[Great Epic] p.92)。賢者たちは、ブラーフマナの教えによって⁸⁵それに従う(cf.Hopkins[Great Epic] p.7, brāhmaṇa)。
- (33) 祭式は、バラモンを起源とし、バラモンによってもたらされた。世界のすべては祭式に従い⁸⁶、祭

⁷³P,K.: sapta sapta ca D. sapta saptadhā

⁷⁴P. te smānyonyamcarāḥ D.,K.: tadanyonyavarāḥ Ca. (reading anyonyacarāḥ) parasparam bhakṣajāḥ / Cs. anyonyavarāḥ, anyonyasmād viśiṣṭāḥ /

⁷⁵upākṛtaṃ Ca. upākṛtaṃ, abhimantritam / Cs. upākṛtaṃ, viniyuktam, upayuktam iti yāvat /

⁷⁶K.はこの詩節の ab 句の後に、以下の詩節を挿入している。

gaur ajo manujāḥ śvā vā aśvāsvataragardabhāḥ /
ete grāmyāḥ samākhyātāḥ paśavaḥ sapta sādhubhiḥ /
siṃhā vyāghrā varāhās ca mahiṣā vāraṇās tathā /
hariṇaḥ śalalās caiva saptāraṇyās tathā smṛtāḥ /

⁷⁷svām śaktim ātmanaḥ Ca. śaktim, dravyādisampattim / Cs. svām śaktim, mayedaṃ kartum śakyam iti yāvat /

⁷⁸vicinvīta Ca. vicinvīta, kartavyatayā niścinvīta /

⁷⁹P. na ca svargas tv ṛte makham D. na ca svargas tato makhāt K. na ca svargo 'sti te makhāt 「彼らには犠牲から天界があるのではない」

⁸⁰P.,D.: sāmāni yajamānās ca K. sāmāni ṛtviṣāś cāpi (sandhi ignored)

⁸¹P. evaṃ pūrve pūrvatarāḥ D. evaṃ pūrvatarāḥ sarve K. evaṃ pūrvatarāḥ pūrve

⁸²na hinastī Ca. na hinastīti / na tu himsā tatra krodhaphalam /

⁸³P. yathoktāni nasaṃśayaḥ D. yajñoktāny anupūrvaśaḥ K. yathoktāny api sarvaśaḥ

⁸⁴P.,K.: tārayanti D. dhārayanti Deussen: (dhārayanti) stützen sich gegenseitig

⁸⁵brāhmaṇasyānudarśanāt Ca. brāhmaṇasya vidhivīdhāyākavedabhāgasya anudarśanād upadeśāt / brāhmaṇajāṭiyasya guror iti vā / N. brāhmaṇasya kriyāyām pravartakasya vākyaśya /

⁸⁶anu yajñam Ca. anu yajñam, yajñanimittam / Cp. yajñam lakṣyīkrtya / Cs. yajñādhinam /

式もまた常に世界に従うのである⁸⁷。

- (34) 「オウム」とは、ブラフマンの⁸⁸母胎である⁸⁹。「ナマス」「スヴァーハー」「スヴァダー」「ヴァシャット」というこれらを用い、能力に応じて祭式を行なう者、
- (35) そのような賢者にとっては、三界の中では他界の恐怖はない、と諸々のヴェーダは述べる。そして成就した最高の聖仙も(そのように述べている)。
- (36) 讃歌、祭文、旋律、感嘆詞は⁹⁰、規定によって定められている。これらすべてが外にあらわれる⁹¹者、それが再生族である。
- (37) アグニアーデーヤ祭において存在するもの、搾られたソーマ酒の中にあるもの、他の大祭とともに⁹²あるもの、それを尊者は自ずから⁹³知っている、再生族よ。
- (38) それゆえ、バラモンよ、祭るべし⁹⁴、祭らしむべし、ためらうことなく。天界の規定によって、祭る者には、死後には天界という大きな果報がある。
- (39) 祭式なきものには、この世界は存在せず、他の世界も存在しない、ということは定まっている。ヴェーダの文章を知る者には、両者は⁹⁵権威である。(Cf.MBh.VI.26.31c)

[261章] (D.268-270章, 9636-9706, K.275章)

カピラ仙は言った。

- (1) 以上のことを知りつつ⁹⁶、道を行く⁹⁷苦行者たちは進む。彼らには、あらゆる世界においていかなる障害 (vyatikrama) もない。
- (2) (彼らは) 対立なく、(誰を) 尊敬することもなく⁹⁸、願望も束縛もなく⁹⁹、目覚め (budha)、あらゆる罪から解放され、清浄にして汚れなく、進むのである。(cf.MBh.XII.234.9,237.24)
- (3) (彼らは) 解脱にも、棄却にも¹⁰⁰、悟りの認識 (buddhi) にも、確信をもち、最高のバラモンであり、ブラフマンとなって、ブラフマンのみを依り所としている¹⁰¹。
- (4) (彼らは) 憂いなく、苦を滅し、彼らの世界は永遠である。最高の境地 (gati) に達した後、彼らにとって、家長期にいかなる目的があろうか。

スューマラシュミ仙は言った。

- (5) もしこれが最高の基盤¹⁰²であり、もしこれが最高の境地だとしても、家長期に基づくことなく、他の生活期は生じない。

⁸⁷ anu jagat, Ca. anu jagat, jagannimitāḥ /

⁸⁸ brahmaṇo N. brahmaṇo vedasya /

⁸⁹ brahmaṇo yonir Cs. yoniḥ āvirbhāvasthānam / N. brahmaṇo vedasya tasmāt praṇavapūrvikā yajñādikriyākartavyety arthaḥ /

⁹⁰ sthobhāś ca Ca. sthobhāḥ gītyādhārahūtāny akṣarāṇi / Cn. sāmāpūrākākṣarāṇi, hā "yi, hā "vu, ityadīni /

⁹¹ P. bahir eva D.,K.: bhavantiḥa

⁹² itarair mahāyajñair Cs. mahāyajñaiḥ, aśvamedhādibhiḥ pañcamahāyajñaiḥ /

⁹³ P. bhagavān svataḥ D. bhagavān punaḥ K. bhavāṃs tathā

⁹⁴ brahman yajeta Ca. (reading brahma) brahmaiva yajeta, brahmārpaṇavidhayā yajeta / yajamānavad ṛtvijo 'pi brahmārpaṇanyāyena yājanam kuryuḥ /

⁹⁵ ubhayaṃ Ca. ubhayaṃ, karmakaraṇam karmatyāgaś ca / ubhaya の内容がはっきりしない。

⁹⁶ P.,K.: anupaśyanto D. anupaśyanti

⁹⁷ mārgagāḥ Cn. mārgagāḥ, mārge saviśeṣāvasthāyām sthitāḥ / Cp. mārgagāḥ satpathagāmināḥ /

⁹⁸ nirnamaskārā Cn. nirnamaskārāḥ na kaṃcin namaskurvanti / cs. phlaecchayā devatānamaskārādirahitāḥ / cv. svātmānam prati paraiḥ kriyamāṇanamaskārāśārahitāḥ /

⁹⁹ nirāśirbandhanā Deussen: von den Fesseln der Wuensche p.453 「願望による束縛もなく」か。

¹⁰⁰ saṃtyāge Cs. saṃtyāge, apavargavirodhinām karmaphalānām tyāge /

¹⁰¹ brahmaṇy eva kṛtālayāḥ Cp. brahmaṇy eva kṛtālayāḥ, na tu gārhashtyacintāparāḥ /

¹⁰² P.,K.: niṣṭhā D. kāṣṭhā

- (6) あらゆる生き物が、母に¹⁰³依存して生きるのと同様に、他の生活期は¹⁰⁴、家長期に依存して存在するのである。(cf.Manu 3.77, Vasiṣṭha DhS. 8.16)
- (7) 家長のみが祭り、家長(のみ)が苦行を行なう。家長期は、何であれ働いている¹⁰⁵ダルマの根本である。
- (8) 氣息をもつすべての者は、聖者よ¹⁰⁶、出生から活動する。そして、出生は、他の生活期には存在しないのである。(Cf.Hara[1997-2] p.231,fn.25)
- (9) 戸外には、植物、そして沢山の森といったものが存在するが¹⁰⁷、再生族よ、植物がなければ¹⁰⁸、いかなる生き物も存在しないのであるから、「解脱は家長期からは存在しない」というこの言葉は、誰にとって真実として存在しようか。(？植物が森の根本であるように、家長期が人生の根本、ということか)
- (10) 信仰もなく、英知もなく、微細なものを見ることできず¹⁰⁹、意欲なく¹¹⁰、怠惰にして、疲弊し、自分の行為によって苦しむ、(いわゆる)遊行者という名の賢者によって¹¹¹、(輪廻の?)疲労が¹¹²消滅すると観察されている。
- (11) 三界の源であり、永遠にして確固とした(この世界の)限界(maryādā)である、バラモンという名の尊者は、誕生以来、敬われている。
- (12) 受胎儀礼に先だって、真言(mantra)が再生族たちに対して用いられる。確信なきもの(天界—来世)においても¹¹³、確信あるもの(天候—現世)においても、(真言が)有効であるのは疑いない。
- (13) (死者の)火葬¹¹⁴、(新たな)抛り所が生じた¹¹⁵者における(新たな身体という)器の享受¹¹⁶、(死者への?)牛や家畜の贈与¹¹⁷、ピンダを水に浸すこと、(これらは真言を伴う)。
- (14) アルチシュマツト(輝く者)、バルヒシャド(草に座る者)、クラヴィヤーダ(肉食する者)という(三種の)祖霊が伝えられている¹¹⁸(ref Ganguli vol.IX, p.260)。真言は、死者にとっても求められる(?anumanyante)。真言こそが(葬儀におけるそれぞれの目的を達成する)原因である¹¹⁹。
- (15) このようにもろもろのヴェーダが声をあげている時、どうして誰かが解脱することがあろうか。人々が祖先、神々、再生族に負債を持っている時に。

¹⁰³ mātrについては、Hara[1997-2] p.226 参照。

¹⁰⁴ P. itare "śramāḥ D.,K.: itarāśramāḥ

¹⁰⁵ P.,D.: yat kiṃcid ejate K. yat kiṃcid eva hi Cn. ejate, yat kiṃcid sukhārthi ceṣtate /

¹⁰⁶ P.,K.: mune D. janāḥ

¹⁰⁷ P. yās tāḥ syur bahir ośadhyo bahu aranyās tathā dvija / D.,K.: yās tu syur bahir ośadhyo bahir anyās tathā 'diryāḥ / Cn. (reading bahirośadhyāḥ) barhiṣṭi ṭṭṇāni, ośadhyo dhānyāni, bahir anyā ośadhyo 'drijaḥ somapūtikādhyāḥ / tāsām mūlam vṛṣṭyādir gārhasthyameva / tathā hy āha agnau prāstāhutih (Manu 3.76) / Cp. bahirośadhyāḥ, yajñād bahirbhūtā ayajñīyāḥ / Cs. ośadhiśabdenātra annam vivakṣyate /

¹⁰⁸ ośadhibhyo bahir Cn. ośadhibyāḥ prāṇād iti samānādhikarāṇe pañcamī /

¹⁰⁹ sūkṣmadarśanavarjitaiḥ yajñīyā hiṃsā na hiṃseti jñānaṃ sūkṣmadarśanam, tadvarjitaiḥ

¹¹⁰ P.,K.: nirāśair D. nirāśair

¹¹¹ P. pravrajyā nāma paṇḍitaiḥ D.,K.: pravrajyāyāmapaṇḍitaiḥ Ca. śraddadhānā vedavacasi kṛtāśvāsāḥ punar grhasthyāpi mokṣam sukhavidhayec chantīty arthaḥ / nāmapaṇḍitair iti sopahāsam /

¹¹² P. śramasya D.,K.: śamasya Ca. śramasya, janmamaṇaprabandhajanyasya / Cp. paragrhe bhojanasiddher uparjanādīśramo nāstīti /

¹¹³ P.,D.: aviśrambheṣu vartante viśrambheṣu apy asaṃśayam K. aviśvasteṣu vartante viśvasteṣu api saṃśritāḥ Cn. aviśrambheṣu, mānāntarāgamyēṣu svargādiṣu / viśrambheṣu aihikeṣu vṛṣṭyādiṣu sādhyeṣu /

¹¹⁴ P. dāhaḥ D.,K. dāhe Ca. dāho mantravān antyeṣṭividhayā prathamāḥ saṃskārah / tataḥ saṃśrayaṇe sapinḍane piṭṭbhāvāḥ saṃskārasādhyāḥ

¹¹⁵ P. saṃstīte D.,K.: saṃśrite

¹¹⁶ P. pātrabhojanam D.,K.: pātrabhojane Cn. dehe punaḥ saṃśrite sati pātraṃ jalam, bhojanaṃ ca, te ubhe tarpaṇanītyāśraddhādirūpeṇa deye / Ca.,Cp.: prativarsaṃ mṛtāhani pātrabhūtānām (Ca. -bhūtasya) brāhmaṇānām (Ca. -ṇasya) bhojanam

¹¹⁷ P.,K.: dānaṃ gavāṃ paśūnām vā D. dāne Ca. gavāṃ ity uttamasampradānalakṣakam, śunām iti nīcavarnasyopalakṣaṇam / Cn. gavāṃ vaitaranyādīnām, paśūnām vā govṛśādīnām utsargaḥ / Cp. dānaṃ gavāṃ, gobhyāḥ piṇḍādīnām dānam ity arthaḥ / paśūnām chāgādibhyāḥ / apsu vā majjanam / tad uktam — piṇḍās tu gojaviprebhyo dadyād agnau jale 'pi vā /

¹¹⁸ pitarāḥ smṛtāḥ D.,K.: pitaras tathā

¹¹⁹ mantrā mantrās ca kāraṇam Cs (reading mantrāmantrās ca) mantrāḥ mantrasahitakarmāni, amantrāḥ mantram vinā tūṣṇīm kriyamāṇakarmāni, upavītasya savyāpasavyakaraṇādīni / Ca. kāraṇam, dharmācaraanayoḥ /

- (16) 幸運に見放された怠惰な¹²⁰賢者によって¹²¹、ヴェーダの文章には認められない、真実のように見える嘘が語られている。(Cf.Hara[1997-2] p.232,fn.31, fn.35)
- (17) ヴェーダ聖典によって¹²² 祭るバラモンは、もろもろの罪によって捕えられず、引きずられない。祭式(を行なう者)は¹²³、家畜を伴って、上方に赴き、(そこに)満足する者は、もろもろの(家畜の)願望を満足させるのである¹²⁴。
- (18) もろもろのヴェーダの侮辱によって¹²⁵、不正直によって、ごまかし(māyā)によって、人は偉大なもの(mahat)を獲得することはない。(人は)ブラフマンをブラフマン(ヴェーダ)において(のみ)見出すのである¹²⁶。(Cf.Hopkins[Great Epic] p.139, fn.1 (māyā))

カピラ仙は言った。

- (19) 賢者にとって、祭式は、新月祭、満月祭、アグニホートラ祭、四月祭と続くが、祭式は彼らにおいては永遠である¹²⁷。
- (20) 行為の企図なく、よく堅忍し¹²⁸、ブラフマンに依存する¹²⁹清浄な者たちは、不死を求める¹³⁰神々を、ブラフマンによってのみ喜ばした。
- (21) (あらゆる生き物の本質となり、生き物を正しく観察する足跡なき者の道には、神々が足跡を求めても迷うであろう。¹³¹。(Cf.MBh.XII.231.22, 254.32)
- (22) 人は四つの門をもち¹³²四つの口をもつ。その人に、非難は(?)四通りに至る¹³³。両手によって、言葉によって¹³⁴、腹によって、性器によって¹³⁵(四通りに)。門を守護する者は、これらの門を守ろうと願うべし¹³⁶。(cf.Hopkins[Great Epic] p.279 scoliis の例外, p.467 No.20)
- (23) 博打をするべきではない。他人の財産を奪うべきではない。生まれ良からぬ者の火を通した食べ物を¹³⁷受け取るべきではない。賢者は、怒りを(他人に)投げかけるべきではない。かくしてこの者の手足は¹³⁸よく守られるのである。
- (24) 怒鳴ることなかれ¹³⁹、無駄に語るなかれ、そして中傷やうわさを¹⁴⁰することなかれ、真実の誓約をもち、言葉少なく、注意深くして。かくしてこの者の言葉の門はよく守られるのである。

¹²⁰ śriyā vihīnair Cp. śriyā vihīnair alasair iti viśeṣaṇābhyāṃ karmāsāmarthyam sūcitam /

¹²¹ P. paṇḍitair apalāpitam D. paṇḍitaiḥ sampravartitam K. paṇḍitaiś ca palāyitam Cp. paṇḍitair iti viśeṣaṇādyauktitvaṃ sūcitam /

¹²² vedaśāstraiḥ Ca. vedaśāstraiḥ, vedair eva śāstraiḥ / atha vā vedaiḥ ṛgādibhiḥ, śāstraiḥ smṛtipradhānetihāsamimāṃsānyāyādibhiḥ /

¹²³ P. yajñāḥ D. yajñaiḥ K. yajann

¹²⁴ P.,D.: samtarpitā tarpayate ca kāmāḥ K. tataḥ punas tarkayate na kāmān

¹²⁵ paribhāvān Cn. paribhāvāt, anādarāt / Cp. vañcanāt / Cs. nindanāt /

¹²⁶ P. brahma brahmaṇi vindati D. brahmaṇi brahma vindati

quad K. brāhmaṇo brahma vindati Cp, Cs.: brahmaṇi vede sāksāt pratipāditam (Cs. prakāśitam) brahma, paramātmānam (Cs. kaivalyam)

¹²⁷ P.,K.: āsaṃs teṣu yajñāḥ sanātanaḥ D. āsaṃs teṣu dharmāḥ sanātanaḥ D. のように dharma と読むと、teṣu が指すのは、四種の祭式になる。

¹²⁸ sudhṛtayaḥ Cp. sudhṛtayaḥ, śobhanā dhṛtiḥ bahirvikṣeparāhityaṃ yeṣām /

¹²⁹ P. brahmasaṃśritāḥ D.,K.: brahmasaṃjñitāḥ

¹³⁰ P.,D.: amṛtaiṣiṇāḥ K. amṛtair iva Cp. amṛtaiṣiṇāḥ, avinaśvaraphalārthinaḥ /

¹³¹ devāpi mārgē muhyanti apadasya padaiṣiṇāḥ Ca. (devāpi に関して) ihārthe apīśabdāḥ / Cp. apadasya tyakamithyāvalambasya, padaiṣiṇāḥ paramapurūṣārthasya [eṣiṇāḥ] / Cv. apadasya laukikasthānāśārahitasya, padaiṣiṇāḥ muktupadaiṣiṇāḥ / muhyanti apadasya と sandhi は無視されている。(Cf.Hopkins[Great Epic] p.197)

¹³² caturdvāraṃ Ca.,Cp.: caturdvāraṃ, catvāri bāhuvacanodarasthā (Cp. -pastharūpāni dvārāni) dvāraṃ ivānarthasya /

¹³³ P. caturdhā cainam upāyāti nindā D. caturdhā cainam upāyāti vācā K. caturmukho nainam upaiti nindā Cn. caturdhā virātsūtrāntaryāmisuddharūpeṇa /

¹³⁴ P.,D.: vāca K. padbhyāṃ (not attested in the critical apparatus)

¹³⁵ udarād upasthāt Cs. udarād upasthād iti tṛtīyārthe pañcamī /

¹³⁶ bubhūset Cp. bubhūset samvṛṇuyāt /

¹³⁷ śṛtaṃ Cn. śṛtaṃ, haviḥ pragṛhāt, pratigrhīyāt / pañcamalakāro 'yam / Cs. (reading śruvaṃ) hīnajanmānaṃ na yājayed ity arthaḥ /

¹³⁸ tatpānipādaṃ Cp. pānipādam ity ukteḥ pādaguptir api kutsitadeśagamananivṛtīyā vivakṣitā /

¹³⁹ P. nākrośam archen D.,K.: nākrośam ṛcchen Cp. (reading na krodham archet) krodhapūrvaṃ na vaded ity arthaḥ /

¹⁴⁰ janavādaṃ Cp. janavādaṃ janaiḥ saha grāmyakathām /

- (25) 断食してはならない。大食してはならない。欲を離れて¹⁴¹、聖者たちと共にいるべし。ここでは(身体)の進行のために食事をとるべし。かくしてこの者の腹に関する門は守護されるであろう¹⁴²。
- (26) 勇者の妻である(?)女と¹⁴³時を過ごすなかれ。女を偽りで呼ぶことなかれ。妻との誓約を自らに保持すべし。かくしてこの者の性器の門は守られるであろう。
- (27) 賢者のあらゆる門、それは性器、腹、両腕、四番目に言葉であるが、それらがよく守られているならば、彼こそは再生族である¹⁴⁴。(Cf.MBh.(B) XII.300[299].28)
- (28) 守られない門をもつ者にとって、すべては無意味である。彼にとって、苦行が何の役に立つのか。祭式が、アートマンが(何の役に立つのか)。
- (29) 外套を着ず、大地を寝台とし、腕を枕とする心静かな者、神々は彼をバラモンと知る。
- (30) あらゆる人が夫婦で住むのを好むのに¹⁴⁵、一人でいるのを楽しみ、他人を気につけない聖者、神々は彼をバラモンと知る。
- (31) この世の一切は、根源と変異とであると¹⁴⁶認識し、あらゆる生き物の行き先を知る者、神々は彼をバラモンと知る。
- (32) あらゆる生き物からの恐れなく、あらゆるものにとって恐れなきものであるから、あらゆる生き物の本性となったもの、神々は彼をバラモンと知る。(Cf.MBh.XII.21.4ab, 168.42ab, MBh.(B) XII.326.33ab, MBh.12 App.I.No.4, line 27, Harivaṃśa 1.30.41ab)
- (33) 人々は、祭式の果報なしには、もろもろのヴェーダを¹⁴⁷承認しない。(賢者は?)、その一切を承認した後¹⁴⁸、他の果報なきものを望むのである¹⁴⁹。
- (34) 人々は、果報を伴い、報いをもたらす永遠なる祭式(karmāṇi)を、劣った性質をもつものと、そして確定的でないものと¹⁵⁰見るのである¹⁵¹。
- (35) ここ(祭式)におけるもろもろの要素(? guna, Deussen: Factoren)は¹⁵²、知るのが極めて困難であり、知られたとしても¹⁵³実行するのが大変難しい。(祭式が規定どおり)行なわれたとしても(果報は)有限である、と汝は見ている。(この章未完)

¹⁴¹P.,D.: alolupaḥ K. na lolupaḥ

¹⁴²P.,D.: jātharī dvāraguptiḥ K. jātharadvāraguptiḥ

¹⁴³vīrapatnīm Cn. he vīra, yudhiṣṭhira(!) / patnīm yajñasaṃbandhavatīm nārīm na vihareta, na vibhajeta, tadupari sryantarakaranena dharmārthakāmeṣu, tām vibhāgavatīm na kuryāt / Cp. vīrapatnīm anyapūrvam na vivahet, ha pariḡḥṇīyāt /

¹⁴⁴P.,K.: sa vai dvijāḥ D. bhaved dvijāḥ Cp. sa vai dvijāḥ, karmāny akṛtvāpi / guptyabhāve karmanām kṛtānām api vaiarthyam /

¹⁴⁵dvandvārāmeṣu sarveṣu Ca. dvandvārāmeṣu, sukhaduḥkhādau baddharatiṣu saṃsāriṣu madhye / Cp. śiṭoṣṇādau baddharatiṣu / Cs. sahāyateṣu /

¹⁴⁶prakṛtir vikṛtiś ca Cp. prakṛtir brahmamātram, vikṛtir māyāhetukaṃ dvaitajātam / N. prakṛtir brahma vikṛtir dvaitam /

¹⁴⁷P.,K.: vedānām yat kriyāphalam D. dānayajñakriyāphalam Ca. vedānām iti vedān ity arthe, chāndasatvāt / karmaṇo vedān vinā kriyāphalam api na jānāntīti avaśyaṃ vedāḥ sarvaiḥ pramānatayā abhyupagamyah /

¹⁴⁸P. anujñāya D.,K.: avijñāya

¹⁴⁹anyad rocyate phalam (D.K.: phalam) Ca. mumukṣuḥ punaḥ tat sarvam abhyanuñjāyāpi aphalam evākhilam karma rocyate, brahmārpaṇavidhyā / Cp. yady api pūrvakāṇḍe phalam antareṇa dānayajñakriyāḥ nānujānanti tathāpi tat phalarāgiṇam pratyanujñāya uttarakāṇḍe phalam antareṇa teṣām eva dānādīnām anyatphalam vidiśākyam rocyate /

¹⁵⁰P.,D.: tathānaikāntikāni ca K. tathā naikāni kena ca

¹⁵¹D.,K. は、この詩節の前に以下の二つの詩節を挿入している。

svakarmabhiḥ saṃsṛitānām tapo ghoratvam āgamat /
tam sadācāram āścaryam purāṇam śāśvataṃ dhruvam //
aśaknuvantaś caritum kiṃcid dharmeṣu sūtritam /
nirāpaddharma ācāro hy apramādo parābhavaṃ //

¹⁵²gunāś Ca. guṇāḥ yajamānasya ṛtvijām ca manahśuddhyādayah /

¹⁵³P. jñātās cāpi D.,K.: jñātās cātra